

Note: The pilgrim's view on Islam, Muslims and Crusades, 1591-1600 : reconsideration on the Later Crusades(10)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24092

研究ノート

1591年～1600年の聖地巡礼記に見る
イスラーム観・ムスリム観・十字軍観
—— 後期十字軍再考 (10) ——

櫻井康人

はじめに

- I. カトリック教会による巡礼者の管理強化
 - II. 船旅に見られる変化
 - III. 巡礼での体験
 1. アラブの恐怖と護衛
 2. 聖墳墓教会にて
 - IV. ムスリム観・イスラーム観
 - V. 十字軍観・聖地回復の希望
 1. 聖墳墓の騎士
 2. 「十字軍」の記憶
 3. 聖地回復の希望
- おわりに

はじめに

1591年にオスマン帝国がビハチの町を占領したことで、1593年に本格化する「長期トルコ戦争（十五年戦争）」が始まった。これによって、パプスブルク家とオスマン帝国との関係は再び悪化し、1595年に教皇クレメンス8世が対オスマン帝国の神聖同盟を呼びかけると、その争いはスペインやネーデルラントも巻き込むこととなり、東地中海でも小規模ながらも幾度かの海戦が起こった。最終的にこの戦争は、1606年のシトヴァトロコ条約によって、オーストリア側に優位な形で終結した⁽¹⁾。オスマン帝国を苦しめていたのは、外交問題だけではなく、1589年にはイスタンブルで、1591年にはチュニジアでイエニチェリの反乱が起こるなど、オスマン帝国の内政、そして経済状況も良好ではなかった。また、聖地巡礼の舞台となるシリア・パレスチナ方面では、勢力を伸ばしていたドルーズ派の首長であるマーン家のファファル・アッディーン2世が中央政府に帰属したが、そ

⁽¹⁾ 同戦争の詳細については、Niederhorn, J., *Die europäischen Mächte und der "Lange Türkenkrieg" Kaiser Rudolfs II. (1593-1606)*, Wien, 1993; Bagi, Z., *Stories of the Long Turkish War*, GlobeEdit, 2018, 等を参照。

れは自治の容認などを引き替えにしていることであった⁽²⁾。

これまでに筆者は、いわゆる後期十字軍を再考するために聖地巡礼記に焦点を当てて考察を行ってきたが⁽³⁾、本稿で対象となる1591～1600年という時期においては、以上のように、聖地巡礼者にとっての環境は決して良好ではなかった。しかし、とりわけ世紀の節目であり聖年でもあった1600年、多くのヨーロッパ世界からは多くの巡礼希望者たちが東方へと向かった⁽⁴⁾。この時期に作成された旅行記の全22作品を、これまでの拙稿における区分に従って分類してみると⁽⁵⁾、A群（メモワール）が0作品、B群（旅行記・地理書・歴史書）が5作品、C群（創作・伝記・年代記）が2作品、D群（聖地巡礼記）が11作品、E群（巡礼ガイド）が0作品、F群（その他）が4作品となる（表1）。全体的な傾向としては1571～1590年のそれと大きく変わることはなく、1580年以降の巡礼記作成者の増加傾向が、やや勢いを衰えさせつつも、そのままに継続したと言える（グラフ）。その地域別についても、基本的には1571～1590年のそれとは変わらないが（地図）⁽⁶⁾、上記の長期トルコ戦争の影響による神聖ローマ帝国領内からの巡礼者数の激減が、1590年代の聖地巡礼記の数の減少につながっていると考えられる。では、1590年代には、それ以外の変

⁽²⁾ このような状況については、永田雄三編『世界各国史9 西アジア史II イラン・トルコ』山川出版社、2002年、250～254頁、等を参照。

⁽³⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）—14世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観—」『ヨーロッパ文化史研究』7号、2006年、1～50頁（以下、「後期十字軍再考（1）」と略記）；拙稿「後期十字軍再考（2）—14世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム世界—」『ヨーロッパ文化史研究』8号、2007年、37～75頁；拙稿「15世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍・イスラーム・ムスリム観—後期十字軍再考（3）—」『ヨーロッパ文化史研究』10号、2009年、53～100頁（以下、「後期十字軍再考（3）」と略記）；拙稿「1450～1480年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（4）—」『ヨーロッパ文化史研究』12号、2011年、179～227頁；拙稿「1481～1500年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（5）—」『ヨーロッパ文化史研究』13号、2012年、199～246頁；拙稿「1501年～1530年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（6）—」『ヨーロッパ文化史研究』14号、2013年、99～133頁（以下、「後期十字軍再考（6）」と略記）；拙稿「1531年～1550年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（7）—」『ヨーロッパ文化史研究』15号、2014年、73～97頁（以下、「後期十字軍再考（7）」と略記）；拙稿「1551年～1570年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（8）—」『ヨーロッパ文化史研究』17号、2016年、53～83頁（以下、「後期十字軍再考（8）」と略記）；拙稿「1571～1590年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観—後期十字軍再考（9）—」『ヨーロッパ文化史研究』18号、2017年、125～158頁（以下、「後期十字軍再考（9）」と略記）。

⁽⁴⁾ 聖地を管理するフランチェスコ会の『巡礼者受入名簿』を見てみると、1597年には41人、1598年には35人、1599年には32人、1600年には21人、1601年には47人が、正式に巡礼者として受け入れられた。これらの数が多かったことは、例えば1588年の1人、1590年の1人と比べると明白である。Lauda, P. (Zimolong, B. (Hrsg.)), *Navis peregrinorum*, Köln, 1938, S. 7-13. なお、『巡礼者受入名簿』の詳細については、拙稿「厄介者の聖地巡礼者—受入側史料から見た聖地巡礼史」『科学研究費補助金基盤研究（B）報告書 中近世のキリスト教会と民衆宗教（代表：早稲田大学文学学術院教授・甚野尚志）』、2010年、102～109頁、を参照。

⁽⁵⁾ 拙稿「後期十字軍再考（1）」10～28頁；拙稿「後期十字軍再考（3）」55～71頁。なお、本文および注の中で触れられる史料の表記方法についてもこれまでの拙稿に準じて、表1に付随する参考文献リストの整理番号に従って記すが、D群はその数字のみを記すこととする。

⁽⁶⁾ 拙稿「後期十字軍再考（9）」126～136頁。

化は見られないのであろうか。以下、聖地巡礼記の中身の分析に移ろう。



地図 巡礼者の出身地・出発地

表1 1591～1600年の旅行記リスト（レリーヒト：70，トブラー：16，シュル：8，ゴメス：10）

A メモワール（聖地回復論覚書）

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考

B 旅行記・地理書・歴史書

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ヤン・ゾマー	1591	ミデルブルフ	騎士	高独	820	48			体験記。対トルコ戦の中で捕虜に。
2	リチャード・ラグ	1593-1595	イングランド	外交使節	英	827				イングランド国王エリザベス1世によってオスマン帝国に派遣されたエドワード・バートン卿に随行。
3	アドリアーン・ファン・ローメン	1595	ルーヴェン	数学者	羅	834				地理書
4	ジュゼッペ・ロザッキオ	1598	パドヴァ	医師・地理学者	伊	842				地図および地理的情報。
5	マテイス・クアート	1600	ケルン	地図製作者	高独	884				地図および地理書。
補	オラウス・マグヌス	16c.前半	ウップサラ	大司教	羅	863				民族・民俗史。

C 創作・伝記・年代記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ゴルゴリオ・ガレアツォ	1591	マントヴァ	神学者	伊	824	49		11	ゴンザーガ公ヴァンチエンツォ1世に捧げた聖地巡礼の指南書。
2	不詳イングランド	16c.	イングランド		英	859				聖地巡礼に関する詩。

D 聖地巡礼記

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ヤコブ・ブンデイ	1591-1592	デizenティス	農民	伊	822				
2	ニコラ・ド・オール	1593	トロワ	市長	仏	825			30	トロワ教会助祭長のジャン・ド・オールに捧げた書。
3	ファン・カヴェリオ・デ・ペラ	1596	ペラ	司祭・教皇使節	西	830	52	134	26	

4	ヨハン・ファン・コートウィック	1596	ユトレヒト	法学者	羅	839	55	151	46	聖ピーテル修道院長のアルセニオ・シヤイクに捧げた書。
5	フィネス・モリソン	1596	カデビー	法学者	英			401		1591年に故郷を出発し、ヨーロッパおよび西アジアにおける10年間に及ぶ旅行の記録。その間に聖地巡礼も行っている。なお、その書は当初はラテン語で作成されたが、その後本人による英語版が作成された。
6	クリシュトフ・ハラント・ツ・ボ ルジツェ・ア・ベツドルジツェ	1598-1599	クラトヴォイ	フライハル・作曲家	高独	841	56	262		なお、彼は1618年にプロテスタントに改宗した。
7	ヨハネス・ドゥ・ブリウリウス	1599	エノー	コルドリエ会士・神学者	羅	844		179	31	トリーアの聖マクシミリアン修道院長ライナーに捧げた書。聖地巡礼後は、ブザンソンに居住する。
8	アケイランテ・ロケッタ	1599	パレルモ	騎士	伊	845	57	491	65	
9	アンリ・カステラ	1600-1601	ポルドー	フランチェスコ会士・宗教監督官	仏	878	58		23	国王顧問官のシュジャック領主ネスモンに捧げた書。
10	ステファアーノ・マンテガッツァ	1600-1601	ミラノ	ドミニコ会士	伊	889			56	
11	ジョン・サンダーソン	1598-1602	ロンドン	商人	英	843				1588年から1602年の間に3回の東方旅行を行い、1601年に聖地巡礼を行った。

E 巡礼ガイド

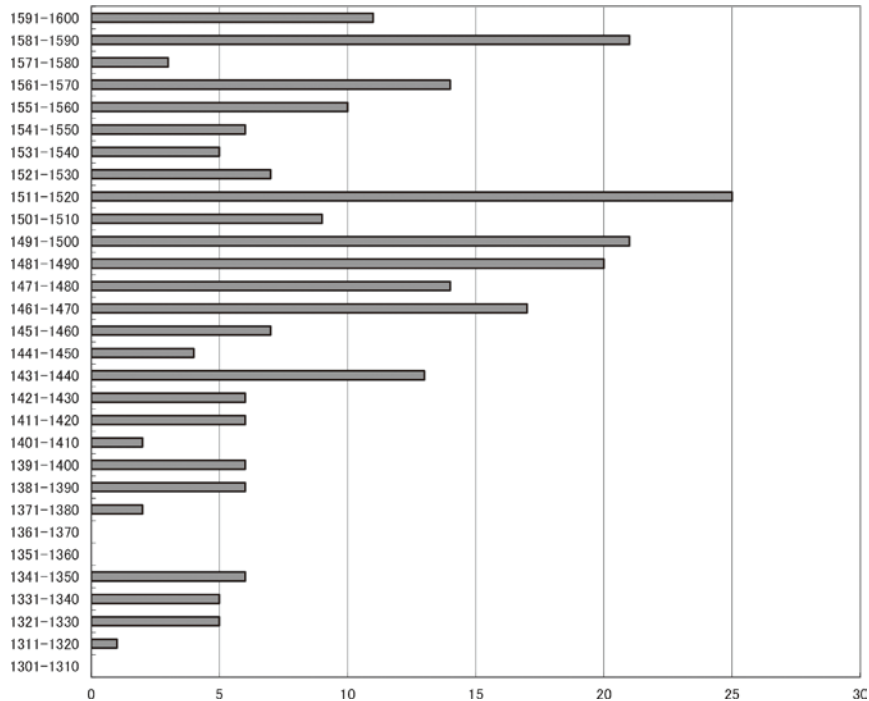
整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考

F その他

整理	名	年	出身	社会	言語	Rö	To	Sc	Go	備考
1	ベルナルディーノ・アミーコ	1596	ガリポリ	フランチェスコ会士	伊	837	53	13	4	聖所の建築物やその周囲の自然環境に関する報告書。
2	ジローラモ・ダンディーニ	1596	チェゼーナ	イエズス会士	伊	838	54	165		マロン派へのミッション活動に関する書。
3	ヨハネス・ウィランバルドゥス	1596-1605	コルドバ	イエズス会士	羅	840				聖地の情報を含む神学書。
4	ウィリアム・ビッドウルフ	1600	ハレブ	司祭	英	877	62			アレクサンドリアからの書簡。シリヤに関する情報を多く含む。

表2 移動経路

D-1	ヴェネツィア→コルフ→カンディア→ファマグスタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ→トリポリ→サリーネ→ファマグスタ→カンディア→ザンテ→ヴェネツィア
D-2	ローマ→ヴェネツィア→ザンテ→リマソル→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→ラムラ→ヤッファ→リマソル→カンディア→コルフ→ヴェネツィア
D-3	ローマ→ヴェネツィア→コルフ→ザンテ→カンディア→リマソル→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ヤッファ→トリポリ→ファマグスタ→サリーネ→ロドス→カンディア→チェリ－ゴ→ザンテ→ケファロニア→コルフ→ラグーザ→ヴェネツィア→ローマ
D-4	ヴェネツィア→コルフ→カンディア→ロドス→ファマグスタ→トリポリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→アレppo→アンティオキア→トリポリ→アレクサンドリア→キプロス→ザンテ→ロビーニョ→ヴェネツィア
D-5	ヴェネツィア→ザンテ→カンディア→サリーネ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ヤッファ→トリポリ→アレppo→スカンダレオン→カンディア→イスタンブル→アテネ→チェリ－ゴ→ザンテ→コルフ→ラグーザ→ロビーニョ→ヴェネツィア
D-6	ヴェネツィア→ザンテ→カンディア→リマソル→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ガザ→ダミエッタ→カイロ→シナイ山→カイロ→ロゼッタ→アレクサンドリア→カンディア→ザンテ→コルフ→ヴェネツィア
D-7	ヴェネツィア→コルフ→ザンテ→カンディア→キプロス→トリポリ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ダマスクス→エルサレム→シナイ山→アンティオキア
D-8	メッシ－ナ→ヴェネツィア→ザンテ→カンディア→ファマグスタ→アレクサンドリア→アンティオキア→アレppo→アンマン→ダマスクス→エルサレム→ラムラ→ガザ→シナイ山→カイロ→ロゼッタ→アレクサンドリア→カンディア→マルタ→パレルモ
D-9	ローマ→ヴェネツィア→コルフ→ザンテ→カンディア→ロドス→キプロス→トリポリ→アレppo→ダマスクス→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ガザ→シナイ山→カイロ→アレクサンドリア→リマソル→ロドス→カンディア→コルフ→ラグーザ→ロビーニョ→ヴェネツィア
D-10	ローマ→ヴェネツィア→ザンテ→アレクサンドリア→カイロ→シナイ山→カイロ→ダミエッタ→ヤッファ→ラムラ→エルサレム→ラムラ→ガザ→アレクサンドリア→コルフ→レシーナ→ザラ→ヴェネツィア
D-11	ロンドン→アルジェ→アレクサンドレッタ→イスタンブル→シドン→ダマスクス→サフェド→ラムラ→エルサレム→サフェド→ダマスクス



グラフ 1301年～1600年の聖地巡礼記数

I. カトリック教会による巡礼者の管理強化

1590年代、聖地巡礼を目指す者たちがまず向かったのは、やはりヴェネツィアであった。スペイン支配下のシチリア出身の8は、当時のスペインとオスマン帝国との関係を考慮して、アレppoと良好な交易関係を維持するヴェネツィアを出港地として選んだ⁽⁷⁾。また、フランス人である9は、一度マルセイユやジェノヴァで乗船するものの、より安全性が高いと判断したヴェネツィアからの巡礼を選択した⁽⁸⁾。また、この時期の巡礼記作者たちに特徴的なのは、過去の巡礼記を参考書として入念に予習をしていたことであり、特に1586年に聖地巡礼を行ったヨハン・ツアラルトや、1588～1590年に巡礼を行ったジャック・ド・ヴィラモンなど、ヴェネツィアを出港地とした者たちの作品が広く流布していたようである⁽⁹⁾。そして何よりもヴェネツィアが出港地として選ばれた理由には、カトリック教会による聖地巡礼者の管理の厳格化があった。

巡礼志願者たちは、まずローマで教皇庁の発行する巡礼許可書を入手する必要があったが、2によると許可をもらうのは容易でなく、フランチェスコ会からの厳格な事前審査（出生・出身地などのチェック）を通過する必要があった⁽¹⁰⁾。なぜこの時期に教皇庁の管理が厳しくなったのかについては、対抗宗教改革の進展、スペインとフランスとの戦争、1600年という節目を迎えるに当たって予測される巡礼希望者の増加、などが状況証拠的には考えられるが、正確なところは解らない。いずれにせよ、まずローマに立ち寄りなければならない巡礼志願者たちは、地理的な問題からヴェネツィアを出港地に選択したのであろう。そして、たとえローマに行くことが困難であったとしても、ヴェネツィアには教皇特使、教皇代理人およびフランチェスコ会聖地管区長が巡礼許可書を発行してくれる出先機関が設けられていた⁽¹¹⁾。

ただし、宗教改革が始まって久しいこの時代、すべての巡礼志願者がカトリックというわけではなかった。今回対象となった巡礼記作者の中で唯一ヴェネツィアを経由しなかったのは英国教徒の11である。商人である彼は独自のルートで度々東方を訪れており、彼

⁽⁷⁾ 8, p. 17.

⁽⁸⁾ 9, p. 4 f., 7.

⁽⁹⁾ 2, fol. Aiii1; 4, fol. 4, 21 f.; 5, 1-p. 447; 8, p. 188; 10, p. 30, 330, 404. その他として、6はブルクハルト・フォン・モンテジオン、ルドルフ・フォン・ズートハイム、ベルンハルト・フォン・プライデンバハ、ハンス・トゥーヒャー、ヤン・パスカなどの巡礼記や、マルコ・ポーロの作品も読んでいた。6, fol. 118 f., 189 f., 226, 228, 282, 287, 455, 586. 加えて、4・6・9は、プリニウス、ストラボン、プトレマイオス、ヘロドトスなどの古典作品にも精通している。4, fol. 4, 6, 21 f.; 6, fol. xxxiii r.; 9, p. 46 ff.

⁽¹⁰⁾ 2, fol. 4r, 8r-9r. 他に、8, p. 16; 10, p. 16, 35.

⁽¹¹⁾ 1, p. 156. 加えて、1はヴェネツィアの元老院の許可書とアクイレイア大司教の許可書も必要であったとしている。

が聖地巡礼を行う決心をしたのはイスタンブルに滞在している時であった。そこで彼は、スルタン発行のエルサレムのサンジャク・ベイ宛て書状、およびコンスタンティノープル総主教発行のエルサレム総主教宛ての書状を入手して、マーメイド号に乗り込んでティールを目指した⁽¹²⁾。このようにして聖地に到着した彼は、在地のフランチェスコ会士との間にトラブルを抱えることとなるが、それについては後述したい。

さて、上記のような厳しい審査を乗り越えてヴェネツィアに集結した巡礼者たちは、どのぐらいいたのであろうか。3人の同行者とともにもヴェネツィアにてパトロンとの契約を済ませた1が乗り込んだ船には、計11人が乗船した⁽¹³⁾。5の場合は、ヴェネツィアで知り合ったフランス人やフラマン人の6人とともに、アジア方面行きの船を探した⁽¹⁴⁾。聖年に旅立った9によると、フランコ・デュランテをパトロンとする船には、商人も含めた72人が乗船したが、その内の30人が巡礼者であり、さらにその内の2人がフランス人であった⁽¹⁵⁾。残りの者たちは人数について記していないが、2の乗船した、マルコ・ヴァキネットをパトロンとするセバスティアーノ・バルビーニ号には、ドイツ・フランドル・フランス・イタリア・スペインから、3の乗船した船にはフランス・フランドル・ドイツ・イングランド・イタリア・スペインからと、ヨーロッパ全土から巡礼志願者がヴェネツィアにやって来ていた⁽¹⁶⁾。また、やはり聖年に聖地を目指した10によると、巡礼者たちはラ・ナーナ・フェッラ号（2人のパトロン、ナーノとフェッロの名から名付けられている）と、バッティスタ・タイエロ号に分乗した。10が前者に乗ることを選んだのは、それが「良い軍船」*ben'armata nave* だったからであった⁽¹⁷⁾。

しかし、過去の巡礼記で予習をしてきた者たちの目には、今のヴェネツィアは人気の少ない廃れた港町と映った。すでにヴェネツィア政府はガレー巡礼船システムを廃止していたが⁽¹⁸⁾、5は制度廃止の理由を、オスマン帝国による護衛代金の前払いの強制をヴェネツィア政府が嫌ったためであると考えている⁽¹⁹⁾。ともかくも、巡礼者たちが乗り込んだのは、

⁽¹²⁾ 11-(2), p. 95, 121.

⁽¹³⁾ 1, p. 153, 155, 158. なお、その後のヤッファでさらに4人の巡礼者が加わるなどして、最終的には18人の巡礼団となった。1, p. 162 f., 166.

⁽¹⁴⁾ 5, 1-p. 446.

⁽¹⁵⁾ 9, p. 10, 41 f.

⁽¹⁶⁾ 2, fol. 4r f; 3-(2), p. 22 f. なお、3の乗った船には、他にトルコ人・アルメニア人・シリア人・マロン派・ギリシア人が乗船した。

⁽¹⁷⁾ 10, p. 17, 37 f.

⁽¹⁸⁾ ガレー巡礼船システムについては、拙稿「『無料で運ぶわけではない、神の愛のために運ぶわけでもない』—中世におけるヴェネツィア・ガレー巡礼船のパトロンたち—」『史林』97巻1号、2014年（以下、「パトロン」と略記）、50頁。

⁽¹⁹⁾ 5, 1-p. 447, 2-p. 35 f. ただし、ガレー巡礼船制度廃止の背景には、巡礼者たちからのクレームへの対応に苦慮したヴェネツィア政府の決断であったことは、拙稿で示したとおりである。拙稿「パトロン」72頁。なお5は、船ではシラミに苦しめられたものの、パトロンのショーマンシップ（歌

主としてキプロスに向かう商船であった。巡礼者たちがどれぐらいの船賃を払ったのかについて見てみると、2の場合はキプロスまでの片道運賃5エキュ(=35リーブル)に加えて、パトロンと同じ食事をすることができることの代金として1日につき8エキュと、パトロンへの感謝の印として8エキュを支払った⁽²⁰⁾。4は、パトロンのバッティスタ・タイエロ(上記の10の記述にも登場する)に、12ツェキーノを払った⁽²¹⁾。ヴェネツィアで出会った人々と船を探していた5は、ようやくのことでギリシア人パトロンのコンスタンティン・コルリのレッセ・リオン号を見つけ、交渉の結果、パトロンと質の良い食事をすることを込みとして、1ヶ月4銀クラウン(=28リール、ただし乗船日数が1ヶ月に満たない場合はその分を返金する)で話がついた⁽²²⁾。6の場合は、200人乗りの商船に30クローネ(=43ドゥカート)と、やや高額で乗った⁽²³⁾。9の乗った船は、1人につき25~30エキュであり、10の場合、キプロス経由アレクサンドリア行き片道運賃は8~10ドゥカートであった⁽²⁴⁾。ガレー巡礼船運賃の平均相場が45~50ドゥカートであったことと比べると割安であり、かつ1580年代に見られたように、法外な船賃が要求されることもなかった⁽²⁵⁾。従って、ようやく1590年代に入って、運賃の点では巡礼者運搬に関する暗黙のルールが整ったようである。

ただし、商船であるからといって、安全が保証されたわけではなかった。トルコ人の恐怖について乗船前に聞かされることは、それまでと同じである⁽²⁶⁾。予測される危険を回避するために、2はヴェネツィア商人のなりをし、5はヨーロッパ風の衣服を覆い隠すためにロング・コートを購入した⁽²⁷⁾。巡礼者たちは、このようにして準備を整えたが、彼らに必要であったのは、巡礼許可書に加えて、「堅い信仰」*ferme Foy*、「忍耐」*Patience*、そして「金」*Argent*であった⁽²⁸⁾。

や見せ物の披露)や礼儀正しさを称賛している。5, 1-p. 450, 452.

⁽²⁰⁾ 2, fol. 5r, 83r.

⁽²¹⁾ 4, fol. 2.

⁽²²⁾ 5, 1-p. 447 f. なお、船には多くの東方キリスト教徒・トルコ人・ベルシア人・インド人が同乗した。5, 1-p. 451.

⁽²³⁾ 6, fol. 29 f., 67, 72.

⁽²⁴⁾ 9, p. 41 f.; 10, p. 21, 30.

⁽²⁵⁾ 拙稿「パトロン」56~59頁; 拙稿「後期十字軍再考(9)」138頁。ただし、ガレー巡礼船制度においては、聖地で支払う税や護衛代金なども含まれていたため、運賃そのものに関しては大きく変わらない。

⁽²⁶⁾ 6, fol. 31, 66; 10, pp. 14-16, 18, 22; 9, p. 4f.

⁽²⁷⁾ 2, fol. 6r; 5, 1-p. 449. 加えて5は、緑色の服はムスリムしか着ることができないので避けるようにと、読者に注意喚起している。5, 1-p. 451.

⁽²⁸⁾ 2, fol. 71; 3-(2), p. 156; 4, fol. t3r f.; 10, p. 17, 21, 23, 30-33.

II. 船旅に見られる変化

当該時期の海の旅についてまず指摘すべきは、航行ルートに変化が見られることである。前稿で見たように、1570年代以降、通例の経路はヴェネツィア～ヴァローナ～キプロス～トリポリとなっていた。ヴァローナ以降の各拠点にはカーディーが巡礼者の管理役として配備され、そして厳しいチェックの後に通行許可書が発行された⁽²⁹⁾。ところが、1590年代に入ると、上記の経路がヴェネツィア～キプロス～ヤッファと、かつてのものに戻るのである。加えて、通行許可書に関する記述も見られなくなる。

確かに、船旅の中で、巡礼者たちはオスマン帝国の勢力の大きさを実感した。ダルマチアからギリシア世界に至る多くの場所・島々は、オスマン帝国の支配下に置かれていた⁽³⁰⁾。ラギーザは、オスマン帝国に多額の税を払うことで、ようやく独立を保っていた⁽³¹⁾。ザンテヤクレタ島のハニアは、ヴェネツィア支配下に置かれてはいるが、やはりオスマン帝国に税金を納めていた⁽³²⁾。コルフは1590年にオスマン帝国からの攻撃を受け⁽³³⁾、さかのぼって1570年にはレシーナ（現フヴァル）、ドルチーノ（現ウルツイニ）やザラも攻撃にさらされた⁽³⁴⁾。そして、総じて地中海世界ではトルコ海賊が横行し、巡礼者たちの恐怖心を煽り⁽³⁵⁾、実際に海賊船との戦争シーンを目の当たりにする者や⁽³⁶⁾、さらには乗船していたヴェネツィア籍船が海賊船に拿捕されるという経験をする者や⁽³⁷⁾、海賊によって船員が殺害されてしまうという経験をする者もいた⁽³⁸⁾。

また、多くの巡礼者たちは、ヤッファ行きに船に乗り換えるために⁽³⁹⁾、今やオスマン帝国領となったことを実感させるキプロス⁽⁴⁰⁾で一度下船せねばならなかったが、まずそこで上陸税を払った。例えば、1はサリーネで5ツェキーノを、4はファマグスタで「心付け」*cortesie*として3ツェキーノを支払った⁽⁴¹⁾。そして、そこで異教徒の支配下に置かれたキリ

⁽²⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考（9）」139～141頁。

⁽³⁰⁾ 2, p. 26; 3-(2), p. 142, 150; 4, fol. 13 f., 19-23, 25, 40 f., 58, 89-92; 5, 1-p. 455, 2-p. 85; 6, fol. 88 f., 106; 8, p. 186; 9, p. 56.

⁽³¹⁾ 3-(2), p. 150; 5, 1-p. 454, 2-p. 111; 6, fol. 83; 9, p. 491 f.; 10, p. 437.

⁽³²⁾ 1, p. 24 f.; 6, fol. 100; 9, p. 66; 10, p. 46.

⁽³³⁾ 4, fol. 25.

⁽³⁴⁾ 3-(2), p. 150; 9, p. 494; 10, p. 438, 442.

⁽³⁵⁾ 3-(2), p. 146 f.; 5, 2-p. 88, 108; 6, fol. 79; 8, p. 28, 183; 9, p. 52, p. 477; 10, p. 59.

⁽³⁶⁾ 9, p. 63 f.

⁽³⁷⁾ 5, 2-p. 109. その後、彼は金銭を支払って解放された。

⁽³⁸⁾ 9, p. 487 f.

⁽³⁹⁾ 2, fol. 181 f.; 3-(2), p. 27; 5, 1-p. 460.

⁽⁴⁰⁾ 1, p. 160 f.; 2, fol. 791; 3-(2), p. 123, 133 f.; 4, fol. 95-98; 5, 1-p. 182 f., 458; 6, fol. 111, 121, 125 f.; 8, p. 35 f.; 9, p. 470.

⁽⁴¹⁾ 1, p. 160 f.; 3-(2), p. 115; 他に、2, fol. 221 f.; 3-(2), p. 27; 6, fol. 114 f., 127, 132 f. なお2は、サリーネにて、ミカエーレ・デイ・ラーマという名の通訳と10ツェキーノで契約している。2, fol. 17r.

スト教会の現状を目の当たりにした⁽⁴²⁾。ヴェネツィア人たちがキプロスで交易できるのも、トルコ人に税金を払っての上のことであった⁽⁴³⁾。また1や3のように、トルコ人役人からの嫌がらせのために足止めを食らう者もいたが、いずれも帰路での出来事であった⁽⁴⁴⁾。1の場合は、サリーネにて役人に「大トルコの通行許可書」*ilg Paporta digl grond Türg*を要求されたが、不携帯であったために揉めた。当該時期における唯一の海上での通行許可書に関するこの記述は、基本的に当時は通行許可書が不要であったことを逆に示している。いずれにせよ、金銭で事を解決させた1は、リマソルでヴェネツィア船に乗った時に、トルコ人の手からの解放を実感するのであった。また、役人からの嫌がらせに苦しんだ上に、金銭の支払いを巡って投獄までされた3も、金銭にて問題を解決させた後に、「神の憐憫によりかつてのような自由が訪れますように」*de la Misericordia de Dios, la liberará en lo por venir commo en lo passado*と祈るのであった。彼らに共通するのは、ヴェネツィアの影響力の強い場所に入ると同時に安心感を覚えていることであるが、当該時期の聖地巡礼記全体から強く印象付けられるのは、ヴェネツィア領域内にいる時の安堵感である。

確かに、巡礼者たちはプレヴェザの海戦における神聖同盟の敗北も記憶しており、それは彼らの「大きな恐怖」*grandissimo timore*にも繋がった⁽⁴⁵⁾。しかし、それ以上に彼らが記憶していたのは、レパントの戦いにおける「奇跡的勝利」*miracolosa vittoria*であった⁽⁴⁶⁾。そのような彼らにとって、クレタ・チェリーゴ・ザンテ・ケファロニア・コルフを始めとするヴェネツィア支配下に置かれた拠点とは、キリスト教世界にとっての心強い防衛拠点と感じられた⁽⁴⁷⁾。恐らくは、上記の1590年にオスマン帝国によるコルフへの攻撃を退けたことが、ヴェネツィアに優位な航行条件を与えたのであろう。その結果として、ヴェネツィア船はヴァローナに寄港する必要や、オスマン帝国の発行する通行許可書を携帯する必要がなくなったと考えられる。むしろ、一部の者たちが地中海におけるイングランド船とスペイン船の衝突を脅威に感じていたことのほうが、興味深く感じられる⁽⁴⁸⁾。

⁽⁴²⁾ 4, fol. 104-109.

⁽⁴³⁾ 2, fol. 161; 4, fol. 114.

⁽⁴⁴⁾ 1, pp. 186-191; 3-(2), pp. 125-149.

⁽⁴⁵⁾ 8, p. 28. 他には、4, fol. 28 f.

⁽⁴⁶⁾ 10, p. 52 f., 56. 他には、4, fol. 33, 47; 5, 1-p. 182 f., 246; 8, p. 28.

⁽⁴⁷⁾ 3-(2), p. 147, 150 f.; 4, fol. 82 f.; 5, 1-p. 455, 457, 2-p. 106 f., 110; 6, fol. 82, 92; 7, fol. 3; 8, p. 32, 187; 9, p. 57 f., 65, 490; 10, p. 436.

⁽⁴⁸⁾ 5, 2-p. 109, p. 66; 11-(2), p. 90. イングランド人の5や11は、スペイン艦隊の存在に恐怖した。

III. 巡礼での体験

1. アラブの恐怖と護衛

結論を先に記すと、この時期に巡礼者たちが聖地周辺域で経験したことは、以前の時期のそれと大きく変わることはない。

トリポリではなくヤツファに到着した巡礼者たちは、まずそこで役人から身分や所持品のチェック（ワインや武器の没収）を受けつつ税や護衛代を納め、カーディーの証明書を発行してもらい、ムカーロとの契約を行う⁽⁴⁹⁾。確かに役人は、「貪欲なムハンマド教徒」ingordi Mahometaniであったが⁽⁵⁰⁾、「心付け」courtoisieを支払いさえすれば「平穩」paixであり⁽⁵¹⁾、ラムラへの道のりは「快適」pleasantなものであった⁽⁵²⁾。当時のラムラのスイパーヒーであったアミンは⁽⁵³⁾、かなり強欲な「悪」maleであったようであり⁽⁵⁴⁾、「悪しき心付け」la mala cortesíaを度々要求し⁽⁵⁵⁾、巡礼者たちに暴力も振るったが、巡礼者たちは「忍耐」la patienceで乗り切った⁽⁵⁶⁾。巡礼者たちはかつてフィリップ善良公が建てた巡礼宿に宿泊したが、それは家畜小屋のようなものに化しており⁽⁵⁷⁾、トルコ人やムーア人が入ってきては食べ物を要求するなどした⁽⁵⁸⁾。

エルサレム入市の際にも、1人約2ツェキーノの税を徴収され、カーディー、サンジャク・ベイやスイパーヒーからの厳しいチェックを受けた上に、彼らにも金銭の支払いを要求された⁽⁵⁹⁾。このような税の取り立てと厳しい管理は事ある毎に行われ⁽⁶⁰⁾、加えて現地住民からの嫌がらせもあった⁽⁶¹⁾。上記のアミンの強欲さは、帰りの際にはさらに強まり、巡礼者たちはさらに多くの「強制的心付け」les cuortoisies forcesを要求された⁽⁶²⁾。シナイ山巡礼をオプションに加えた巡礼者たちには、その分だけ関所が増えた⁽⁶³⁾。

⁽⁴⁹⁾ 1, p. 162; 2, fol. 23r f.; 3-(2), p. 29; 4, fol. 134; 5, 1-pp. 462-464; 6, fol. 137-140; 9, p. 91 f., 96 f.; 10, p. 187, 190. トリポリに降り立った9も同様である。9, p. 72.

⁽⁵⁰⁾ 10, p. 190.

⁽⁵¹⁾ 2, fol. 24r; 9, p. 97.

⁽⁵²⁾ 5, 1-p. 464.

⁽⁵³⁾ 2, fol. 23r f.

⁽⁵⁴⁾ 4, fol. 139 f.

⁽⁵⁵⁾ 3-(2), pp. 30-33. 他に、1, p. 163; 2, fol. 271 f.; 4, fol. 139 f.; 6, fol. 148; 9, p. 105.

⁽⁵⁶⁾ 2, fol. 25 f. 他に、5, 1-p. 467.

⁽⁵⁷⁾ 5, 1-p. 464.

⁽⁵⁸⁾ 2, fol. 26r; 8, p. 198; 9, p. 102 f.

⁽⁵⁹⁾ 1, p. 166; 3-(2), p. 34; 4, fol. 151; 5, 2-p. 468; 6, fol. 166 f.; 8, p. 82 f.; 9, p. 115; 10, p. 205.

⁽⁶⁰⁾ 1, p. 180; 2, fol. 391; 3-(2), p. 39 f., 44, 47 f., 76, 114 f., 119; 4, fol. 256 f., 259, 366-370, 382, 496; 5, 2-p. 14, 20, 47, 53, 62, 67; 6, fol. 232, 247 f., 278, 297, 319, 374-376; 7, fol. 7, 12; 8, p. 37, 39, 91 f., 99, 104, 136; 9, p. 166, 172, 195, 348.

⁽⁶¹⁾ 2, fol. 68r f.; 3-(2), p. 44, 47; 4, fol. 246, 250, 258 f., 354; 5, 2-p. 15; 8, p. 72, 94 f.; 9, p. 167 f., 244, 365.

⁽⁶²⁾ 2, fol. 78r. 他に、3-(2), p. 106, 157; 5, 2-p. 47; 9, p. 361.

⁽⁶³⁾ 6, fol. 515, 542, 571, 574, 662, 715, 772; 8, p. 152, 155, 158; 9, p. 370, 377, 460; 10, p. 82.

また、護衛役であるはずの役人たちからの被害を受ける者もいた。5は、トリポリからハマに向かうに当たってキャラバンに同行したが、その際にイエニチェリがキャラバンの人々をむち打ち始めた。見逃してもらうためには、1ツェキーノを払わねばならなかった⁽⁶⁴⁾。6は、ダミエッタにおいて現地のパシヤから寵愛を受けているフランス領事の家身に身を寄せていたにもかかわらず、理由も解らずに役人に投獄された。最終的には事なきをえたものの、投獄されている間に目の当たりにしたキリスト教徒奴隷の売買の様子が、彼を恐怖に陥れた⁽⁶⁵⁾。8の場合は自業自得でもあるが、ワインを携帯していたためにアンマンにて一時捕縛された⁽⁶⁶⁾。11も、トリポリにて在地のアミールなどの「不正なる呪うべきムーア人たち」*false accursing Moores*によって投獄された⁽⁶⁷⁾。

そして、中でも最も酷い目に遭ったのが、9である。ラムラからエルサレムに向かう道中、歩くのが遅い彼は、足手まといとして「怒り」*furieux*の目を向けられ、スイパーヒー（9はライスとも記している）によって何度も棒で殴打され、死まで覚悟したのであった⁽⁶⁸⁾。また、ガザからシナイ山を目指す道中でも、彼は護衛のイエニチェリから何度も殴打された上に、金銭を巻き上げられた。アラブ強盗団から襲撃を受けた際、一応イエニチェリは応戦してくれたが、最終的に9は強盗団とイエニチェリ双方に「心付け」*courtoise*として60ツェキーノもの金銭を払わねばならなかった。彼にとって、イエニチェリこそが「強盗」*voleur*であった⁽⁶⁹⁾。このような経験をした9が、役人たちに対して好印象を持つはずはなかった。同様に、3は、総じて聖地の「暴君」*tiranos*であるトルコ人役人たちはキリスト教徒に侮辱と苦痛しか与えないとし、7も彼らを「高慢」*supercilium*と罵る⁽⁷⁰⁾。しかし、役人たちを酷評するのは、この3名に限定される。より多くの者たちは、逆に役人たちを称賛しているのである。その背景には、アラブ人の恐怖があった。

相変わらずラムラ近辺にはアラブ人の強盗団が巣くっていた。彼らもまた「心付け」*cortoise*を要求した上に、巡礼者に対して殴るなどの様々な嫌がらせをした⁽⁷¹⁾。ベツレヘ

⁽⁶⁴⁾ 5, 2-p. 55 f.

⁽⁶⁵⁾ 6, fol. 517 f., 544, 547-555.

⁽⁶⁶⁾ 8, p. 53. なお8は、その後にエルサレムに向かうに当たって、ネストリウス派のアンティオキア総主教とともに、アラブ人の服装をして移動した。8, p. 65.

⁽⁶⁷⁾ 11-(2), p. 90 f.

⁽⁶⁸⁾ 9, p. 111 f., 123, 145.

⁽⁶⁹⁾ 9, pp. 375-383.

⁽⁷⁰⁾ 3-(2), p. 100 f.; 7, fol. 31.

⁽⁷¹⁾ 9, p. 101. 他に、2, fol. 28r-29r.; 4, fol. tt3l, fol. 139 f., 142 f.; 5, 2-p. 47; 6, fol. 490; 7, fol. 6; 9, p. 361 f.; 10, p. 198 f.

ム⁽⁷²⁾・ナザレ⁽⁷³⁾・ヨルダン方面⁽⁷⁴⁾も、同様であった⁽⁷⁵⁾。また、シナイ山への巡礼も目指した者たちは、その道中でもアラブ人の恐怖を味わった⁽⁷⁶⁾。実際に被害を受ける事例も少なくはなかったが、総じて巡礼者たちの多くは、アラブ人から自分たちを防衛してくれる役人たちに感謝した。例えば、4は、概して一般のトルコ人は「野蛮人」Barubarusであるのに対して、(アレppoの)パシヤは「友好的」amicitiaであるとする⁽⁷⁷⁾。5は、アラブ人から巡礼者を守ってくれる役人を心強く思い、道中で嫌がらせをしてきたアラブ人に体罰を加えてくれたイエニチェリに3メディンの報酬を与えている⁽⁷⁸⁾。また11の場合、上述のように彼はトリポリでアミールに捕縛されたが、彼を救い出してくれたのはカーディーであった⁽⁷⁹⁾。このように、4・5・6・8・10・11は護衛者としての役人に高評価を与えるが、11を除いた者たちに共通するのは、過去の聖地巡礼記から予習をしていたことである⁽⁸⁰⁾。すなわち、彼らは事前に現地の役人たちの貪欲さについての予備知識を持っていたが、そのような先入観がかえって、金銭対価の護衛という当たり前の仕事にありがたみを感じさせることとなったのであろう⁽⁸¹⁾。

2. 聖墳墓教会にて

言うまでもなく、聖墳墓教会への訪問は、聖地巡礼のメイン・イベントであった。従って、そこでの経験も、また特別なものであった。

⁽⁷²⁾ 1, p. 180; 3-(2), p. 82, 85; 4, fol. 224, 239 f.; 5, 1-p. 20; 6, fol. 309, 317; 7, fol. 26; 8, p. 136, 148; 9, p., 272, 274 f. 293 f., 295 f., 309; 10, p. 269 f., 283 f.

⁽⁷³⁾ 7, fol. 37-39; 8, pp. 74-76; 9, p. 337, 339.

⁽⁷⁴⁾ 2, fol. 701; 3-(2), p. 96 f.; 4, fol. 242; 5, 2-p. 17 f.; 6, fol. 247 f., 259; 7, fol. 34; 8, p. 67, 105, 107, 111; 9, p. 283, 315 f., 329; 10, p. 372 f.; 10, p. 372 f.

⁽⁷⁵⁾ 他に、トリポリ (5, 2-p. 54), ティール (4, fol. 118; 5, 2-p. 49), ダマスクス (4, fol. 365, 390-395; 7, fol. 34; 8, p. 57; 9, pp. 87-90), アレppo (9, p. 83 f.), ガリラヤ (8, p. 69; 11-(2), p. 114), エルサレム (9, pp. 107-113, 207, 267; 10, p. 203), カエサレア (5, 2-p. 47)。

⁽⁷⁶⁾ 6, fol. 579-581, 585 f., 616-620, 811; 7, fol. 40; 8, p. 157, 159, 169 f., 172, 174; 9, p. 362, 364, 373 f., 383, 390, 393 f., 442; 10, pp. 74-76, 131, 133, 154. なお、10は聖カタリナの奇跡として、かつてあるアラブ人の「非人道的」inhumanoであった頭領が、仲間たちとともにキリスト教に改宗した話を紹介している。10, p. 146.

⁽⁷⁷⁾ 4, fol. 417, 449.

⁽⁷⁸⁾ 5, 1-p. 465, 2-p. 47.

⁽⁷⁹⁾ 11-(2), p. 90 f. 他に、4, fol. tt3r f.; 6, fol. 151, 159, 490, 501, 570; 8, p. 15 f., 19; 40, 78, 150, 153-155, 169 f.; 10, p. 24 f., 74-76, 197 f., p. 372 f., 434. ただし、8の場合、役人とアラブ人との癒着も疑っている。8, p. 157 f. なお、9も役人に守ってもらったことについて記しているが、役人にあまりにも酷い目にあった彼が、それに評価を与えることはない。9, p. 98, 293 f. また、過去の聖地巡礼記を参考書とした者の中でも2は、「かなり密かに」le plus secrettement 行動することを心がけた。2, fol. Aiiir.

⁽⁸⁰⁾ 本稿注8。

⁽⁸¹⁾ ただし、かつて拙稿で分析したように、フェルマンは当該時期に巡礼者たちに対する役人たちの不正が、深刻な問題となっていたことを示している。拙稿「エルサレム巡礼史に関する補助的考察—フェルマンの語るもの—」『東北学院大学論集 歴史と文化 (旧歴史学・地理学)』55号、2017年 (以下、「フェルマン」と略記)、200～202頁。

慣例に従って、巡礼者たちはカーディーの管理下に置かれた同教会の入り口で、出身地の確認などのチェックを受けた上で、9 ツェキーノの、場合によってはそれ以上の入場料を徴収された⁽⁸²⁾。5によると、オスマン帝国と同盟関係にあるフランス王国民には、教会内部でミサをあげる特権が付与されていたが⁽⁸³⁾、フランス王国民である9は、ミサをあげる許可を得られなかったばかりか、教会内部でも嫌がらせを受けたこと、および護衛者であるはずのイエニチェリがそれを黙認していたことを嘆いている⁽⁸⁴⁾。このような9にとって、聖墳墓教会は「トルコ人の監獄」les prisons des Turcsであった⁽⁸⁵⁾。3も、「我々の罪深さゆえに」por nuestros pecados 聖墳墓教会が酷い状況に置かれていることを嘆いている⁽⁸⁶⁾。しかし、スペイン王国民である3の場合、悲観的な見方ばかりをしているわけではない。

彼は、聖墳墓教会の現状の歴史を、1333年に締結されたナポリ国王ロベルト1世の妻サンチャとマムルーク朝との協定までさかのぼって紹介する⁽⁸⁷⁾。その上で、現在の聖墳墓教会を支えているのはスペイン国王フェリペ2世であることを強調する⁽⁸⁸⁾。同様に、スペイン国王の宗主権下に置かれたシチリア出身の8も、サンチャの協約に触れた上で、聖墳墓教会を支えた者として、教皇パウルス3世、スペイン国王フェリペ2世およびヴェネツィア共和国の名を挙げる⁽⁸⁹⁾。上に触れたように、8は聖墳墓教会を「トルコ人の監獄」と嘆くのにに対し、3は聖墳墓教会のみならず、都市エルサレム全体がトルコ人によって安全に管理・維持されていることを喜ぶ⁽⁹⁰⁾。方向性は違うが、彼らに共通するのは、カトリック世界の盟主であるスペイン国王と聖墳墓教会との関係の深さを強調していることである。そして、彼らとの対照として、この時期に特徴的であると思われるのが、英国教徒の5と11の経験である。

まず1596年に聖地巡礼を行った5によると、その年にエリザベス1世がオスマン帝国と同盟を結んだこともあって、イングランド人は聖地巡礼を行いやすい環境に置かれていたようであり⁽⁹¹⁾、彼は、オスマン帝国領内について、総じて住民は悪人が多いが、居心地

⁽⁸²⁾ 1, p. 174; 3-(2), p. 37, 50, 73-75; 4, fol. 155-158; 5, 2-p. 29, 35, 46; 6, fol. 289, 327 f.; 7, fol. 12; 8, p. 82 f., 114, 122-124, 130; 9, p. 140, 201, 207, 256; 10, p. 324; 11-(2), p. 107. 上記のように道中で目を付けられたためか、9は入り口で11 ツェキーノを、さらに教会内部で追加料金を払わされている。

⁽⁸³⁾ 5, 2-p. 28.

⁽⁸⁴⁾ 9, p. 145, 150.

⁽⁸⁵⁾ 9, pp. 201-213. 8も同様の表現 (la prigione de Turchi) を用いている。8, p. 119 f.

⁽⁸⁶⁾ 3-(2), p. 43.

⁽⁸⁷⁾ サンチャとマムルーク朝との協定については、拙稿「後期十字軍再考 (1)」6頁、を参照。

⁽⁸⁸⁾ 3-(2), p. 52, 62 f.

⁽⁸⁹⁾ 8, p. 84, 91, 103, 205-208.

⁽⁹⁰⁾ 3-(2), pp. 35-37, 39, 49, 93, 96.

⁽⁹¹⁾ 5, 2-p. 60.

は良いとしている⁽⁹²⁾。彼は、イスタンブルにて当時のイングランド外交官であったエドワード・バートンから、ガイドとしてあるイエニチュェリを宛がわれていた。そのイエニチュェリは、金を払えば「忠実」*faithfulness*であり、そのおかげで本来は入れないはずの聖ソフィア聖堂の観光も楽しむことができた⁽⁹³⁾。そのイエニチュェリをガイドとして聖墳墓教会に入場した彼は⁽⁹⁴⁾、そこで2人のフランマン人と行動をともにすることとなった。彼らはカトリックであったが、スペイン国王に忠誠を誓っていたために、まずはトルコ人役人によって傷つけられた。その上、聖墳墓教会を管理するフランチェスコ会士たちからはプロテスタントであるとみなされ、冷遇された。間もなく、彼らは疫病のために死去するが、5はその死因をフランチェスコ会士たちが彼らを放置したため、さらには彼らが毒を盛ったためであるとまで考える。彼らの遺骸を一度トルコ人役人に引き渡した上で、その埋葬許可を得たフランチェスコ会士たちは、死者の遺品をはぎ取り、場所の特定が困難な形で埋葬した。もし役人に墓を掘り返されて遺品がないことが発覚すると、役人になる過程で多くの財産を失っている（すわなち賄賂）役人たちが、それを基にしてフランチェスコ会士たちを恐喝する恐れがあるからであった⁽⁹⁵⁾。

次に11のエピソードを見てみよう。そもそも、商人として幾度も東方世界を訪れていた彼の巡礼経路が、他の者たちとは異なっていたことは、上で触れたとおりである。イスタンブルにいた彼は、仲間のユダヤ人（恐らくは商人）とともにダマスカスまで行き、そこでエルサレム総主教から案内役を命ぜられたギリシア人司祭と行動をともにした⁽⁹⁶⁾。このことが、エルサレム入市時に問題を招いた。それは、「迷信深い修道士」*superstitious friers*、すなわちフランチェスコ会士が、ギリシア正教徒およびユダヤ人とともに行動していた11をユダヤ教徒とみなした上に、その同行者の英国教徒ティンバリーをスパイとみなして、サンジャク・ベイに通報したことであった。11が剣を所持していたこともあり、2人のイングランド人は捕縛された。彼が携帯していたスルタンの書状を見せることで一度は事なきを得たものの、サンジャク・ベイは「心付け」*couresie*としてベルベットを要求してきた。それを断ると投獄され、結局は12ツェキーノで解放された。しかし、町ではフランチェスコ会士たちが11についてあることないことを言いふらしており、困惑した彼はエルサレム総主教の下に相談しに行ったが、さらにこのことが、11とガーディアン（フランチェスコ会聖地管区長）との対立を導いた。ガーディアンは11を（恐らくは

⁽⁹²⁾ 5, 2-p. 98.

⁽⁹³⁾ 5, 1-p. 444 f., 2-p. 90, 94 f.

⁽⁹⁴⁾ 5, 2-p. 38.

⁽⁹⁵⁾ 5, 2-pp. 43-46.

⁽⁹⁶⁾ 11-(2), p. 95, 102.

スパイ容疑で) カーディーに告訴したが、カーディーはガーディアンを叱責して訴えを退けた。それを受けて、ガーディアンは 11 を聖墳墓教会へと招待するが、11 が拒んだため、再び両者は対立した。後に暗殺されかけた、とまで 11 は主張している。その後に聖墳墓教会へと入場した 11 が向かったのは、金銭を浪費して自分を悪し様に扱った「愚かな偶像崇拝者」foolish idoliters である「教皇の修道士」Popish friers たちが管理する祭壇ではなく、自分を良く扱ってくれたギリシア正教徒の管理する祭壇であった⁽⁹⁷⁾。

以上のように、アルマダの海戦で戦った両国の出身者の聖墳墓教会での経験は、正反対の性格を有するものであった。

IV. ムスリム観・イスラーム観

当該時期においても、幾人かの者がイスラーム信仰について記述しているが、クルアーンを否定的に描いているのは 4 と 7 に限定される⁽⁹⁸⁾。法学者である 4 は、クルアーンおよびそれに付随する風俗について多くの頁を割いているが、それに対する彼の評価は「汚された信仰」cultas polluta という一言に集約されるであろう。ただし、それはカーディーが不正なる者であることに起因し、トルコ人全般は「勤勉」studium と喜捨の精神に富んでいるとしている⁽⁹⁹⁾。同様に、神学者の 7 も、クルアーンへの論駁を行った上で、それは「不浄」pollutio なるムハンマドの著した「人と言うよりは野獣」brutis quam hominibus の信仰であるとしている一方で、ムスリムは「分別」prudencia に富んだ人々であるとする⁽¹⁰⁰⁾。また、7 のように、ムハンマドに負の形容詞を付ける者は幾人かいる。枕詞のように「偽(預言者)」falso/faux/false という表現が加わるものが主であるが⁽¹⁰¹⁾、先の 4 と 7 を併せても、いずれもムスリムたちを誤った信仰へと導く者としてのムハンマドという文脈で現れる⁽¹⁰²⁾。

さて、当該時期の巡礼者たちも、聖地およびその周辺域において、多くのキリスト教会がモスクなどのムスリムの施設と化していることを目の当たりにした。しかし、それに関

⁽⁹⁷⁾ 11-(2), p. 107, 121-123. 彼はベツレヘムの聖誕教会を始めとする他の教会でも、ギリシア正教会が管理している場所を訪れている。11-(2), pp. 110-112. なお、この後に、フランチェスコ会と、ギリシア正教会を始めとする他のキリスト教宗派との間の対立が激化していくことについては、拙稿「フェルマーン」200 頁、を参照。

⁽⁹⁸⁾ 6・8・9・10 もクルアーンについて触れてはいるが、簡単かつ客観的な紹介に留まる。6, fol. 820-826, 834-858; 8, p. 49 f.; 9, pp. 348-350, 376, 408-412, 436 f.; 10, p. 62, 80-82, 92 f., 111-113.

⁽⁹⁹⁾ 4, fol. 308 f., 395-401, 408 f., 410-413, 422-490.

⁽¹⁰⁰⁾ 7, fol. 30-32, 44-50, 79-96.

⁽¹⁰¹⁾ 8, p. 149; 9, p. 73; p. 457 f.; 10, p. 80.

⁽¹⁰²⁾ 5 の、「悪しきムハンマド崇拜」wicked worship of Mahomet も同様であろう。5, 2-p. 8.

する記述のほとんどは、客観的なものに留まる⁽¹⁰³⁾。幾つかの記述には、モスクであるゆえにキリスト教徒は入れないこと⁽¹⁰⁴⁾、さらにはモスクに入るには改宗か死かを選択せねばならないこと⁽¹⁰⁵⁾、その一方で、金品を払いさえすれば入れる場所もあること⁽¹⁰⁶⁾といった、言わばお決まりの情報が付け加わる場合もある。さらに付加される情報という点では、その方向性で大きく二つに分けられる。

一つは、負の感情を付加した情報である。4は、オリブ山のマリア教会などはトルコ人によって「不当に」*injacere* 占拠され、「汚されている」*polluta* としており、10はベタニアの教会について、11はエルサレムの教会についての現状を同様に記す⁽¹⁰⁷⁾。同様に、8は聖アンナの家が「犬」*cani* に支配されていると記す⁽¹⁰⁸⁾。また、5のように、かつてのキリスト教会から聖遺物が持ち去られたことを嘆く者もいる⁽¹⁰⁹⁾。同様に、4や9もトルコ人によって略奪・破壊された教会について記す⁽¹¹⁰⁾。また、6・8・10は、オスマン帝国支配下で、一時的にはあれ様々な宗派のキリスト教徒が教会から排除・駆逐されてことを記す⁽¹¹¹⁾。

そしてもう一つは、ムスリムによるキリスト教的信仰実践の模様についての記述であり、量的にはこちらのほうが多いが、やはりそのほとんどは客観的なものに留まる⁽¹¹²⁾。4・5・6・9のように、ムスリムによるキリスト教会の維持・管理を快く感じる者もいるが⁽¹¹³⁾、その一方で、3や8のように、キリスト教徒のための宗教儀礼へのムスリムの参加を不快に感じる者もいた⁽¹¹⁴⁾。いずれにせよ、この点について、巡礼者たちの関心はさほど高くなかったように感じられる。不便なことも多かったが、概してオスマン帝国領域内では信仰の自由が認められていることを巡礼者たちも実感していたことが、他の信仰に対する関心を低くしたのであろう⁽¹¹⁵⁾。

では、彼らはムスリムによる、イスラーム信仰実践の模様をどのように見たのであろう

⁽¹⁰³⁾ 2, fol. 36r f., 46l; 3-(2), p. 78, 84; 4, fol. 137, 142, 145, 150, 255, 264, 266 f., 275, 280, 293, 299 f., 304, 307, 313 f., 333 f., 340, 376, 408 f.; 5, 2-p. 9; 6, fol. 146, 150, 233, 284, 287, 242, 280, 293, 316, 373; 7, fol. 2; 8, p. 77, 96, 114, 116 f., 121, 131, 133, 135, 137, 154, 189; 9, p. 86, 114 f., 116, 144 f., 147, 157 f., 174 f., 184, 191, 204 f., 219, 300; 10, p. 195, 201, 262, 293, 364; 11-(2), p. 96.

⁽¹⁰⁴⁾ 3-(2), p. 77; 4, fol. 140, 270 f.; 8, p. 59 f.; 9, p. 139, 176; 10, p. 306 f.

⁽¹⁰⁵⁾ 5, 2-p. 8; 6, fol. 161, 240; 9, p. 127, 183, 186 f., 404; 11-(2), p. 101.

⁽¹⁰⁶⁾ 2, fol. 70r; 3-(2), p. 40; 5, 2-p. 9; 11-(2), p. 102.

⁽¹⁰⁷⁾ 4, fol. 278, 283, 295; 9, p. 162; 10, p. 322.

⁽¹⁰⁸⁾ 8, p. 96.

⁽¹⁰⁹⁾ 5, 2-p. 24, 54.

⁽¹¹⁰⁾ 4, fol. 228, 241; 9, p. 142, 194 f., 318, 332.

⁽¹¹¹⁾ 6, fol. 282; 8, p. 76; 10, pp. 205-208.

⁽¹¹²⁾ 3-(2), p. 48, 79, 91 f.; 4, fol. 138, 226, 232, 238 f., 240, 292, 387; 5, 2-p. 13, 16, 21; 6, fol. 2, 282, 297, 323 f., 591 f.; 7, fol. B4l, 7; 8, p. 99, 145, 117; 9, p. 103 f., 257 f., 284 f., 324, 346, 407, 415; 10, p. 266, 312, 321, 360 f.

⁽¹¹³⁾ 4, fol. 226; 5, 2-p. 21; 6, fol. 245; 9, p. 257 f., 363 f.

⁽¹¹⁴⁾ 3-(2), p. 80, 84; 8, p. 122.

⁽¹¹⁵⁾ 4, fol. 415; 8, p. 177 f.; 9, pp. 450-452.

か。多く見受けられるのは、叫びのような祈りという記述であるが、特にそれに対する感情は記されていない⁽¹¹⁶⁾。その他には、「彼らの神ムハンマド」Iur Dias Machomet に対する熱心な崇拜⁽¹¹⁷⁾、沐浴⁽¹¹⁸⁾、アブサロンの墓への投石⁽¹¹⁹⁾、クルアーンに不従順な飲酒⁽¹²⁰⁾、といった記述が見られるが、やはり客観的な記述に留まる。総じて感じられるのは、一般的なムスリムに対する無関心さである。その背後には、役人による巡礼者たちの護衛（監視）体勢の徹底が、嫌がらせをしにやって来る者以外の一般的なムスリムと、巡礼者たちとの直接的な接触を妨げたこともあったのかもしれない。

以上、当該時期においては、総じて巡礼者たちはイスラーム信仰やムスリムに対して無関心であった、とまとめることができよう。4と7の反イスラーム感情が際立つが、前節と照らし合わせると、それが経験に起因したとは考えられない。彼らの反イスラーム感情は、言わば職業柄の問題であったのかもしれない。

V. 十字軍観・聖地回復の希望

1. 聖墳墓の騎士

当該時期において聖墳墓の騎士に関する記述を残しているのは、2・4・5・6の4名である⁽¹²¹⁾。まずは2について見てみると、その叔父ニコラ・ド・オールもかつて聖墳墓の騎士叙任を受けていた⁽¹²²⁾。十字軍運動が家系的連続性をもったように、聖墳墓の騎士になることも、特定の家系にとっては伝統として捉えられていたと考えられる。儀礼の間はトルコ人も、一般のキリスト教徒巡礼者たちもシャットアウトされたが、儀礼が終わると鍵を開けに来たトルコ人役人に心付けを支払った⁽¹²³⁾。また、彼によると、聖墳墓の騎士になるには1人につき25ドゥカートが必要であった⁽¹²⁴⁾。一方、6によると、儀礼にかかる費用

⁽¹¹⁶⁾ 3-(2), p. 120; 4, fol. 316; 6, fol. 818; 7, fol. 22-24; 9, pp. 74-80, 446.

⁽¹¹⁷⁾ 1, p. 186.

⁽¹¹⁸⁾ 4, fol. 358.

⁽¹¹⁹⁾ 6, fol. 323 f.; 8, p. 101; 11-(2), p. 105.

⁽¹²⁰⁾ 10, p. 92 f.

⁽¹²¹⁾ なお、フランチェスコ会側のリストでは8も騎士叙任を受けているが、彼自身はその巡礼記中ではそれについて記していない。Piccirillo, M. (a cura di), *Registrum Equitum SSmi Sepulchri D.N.J.C. (1561-1848)*, Jerusalem, 2006, p. 16 f. また、4は1596年に聖地巡礼を行っているが、リストのほうでは1598年に現れる。また、聖墳墓の騎士の儀礼の詳細については、拙稿「14世紀～16世紀前半の聖地巡礼記に見る「聖墳墓の騎士」—儀礼へのフランチェスコ会の関与過程を中心に—」長谷部史彦編『中近世地中海世界の旅人と旅の記述』慶應義塾大学出版会、2014年、185～215頁、を参照されたい。

⁽¹²²⁾ 2, fol. Aiiiiil.

⁽¹²³⁾ 2, fol. 50l-57r.

⁽¹²⁴⁾ 2, fol. 77r. ただし、別の箇所では1人20ツェキーノ+心付け1ツェキーノであるとしている。2, fol. 85r f.

は剣帯・拍車代金込みで1人100ドゥカートであったが⁽¹²⁵⁾、この金額の差が身分によるものなのか、時期によるものなのかは解らない。いずれにせよ、前の時期と比べると、聖墳墓の騎士になるための金額がさらに高騰していたようである⁽¹²⁶⁾。

さて、その6は、儀礼そのものに加えて⁽¹²⁷⁾、聖墳墓の騎士の起源について記すが⁽¹²⁸⁾、その情報はジャック・ド・ヴィラモンのそれと同じである⁽¹²⁹⁾。この点については4も同様であることから⁽¹³⁰⁾、1580年代よりフランチェスコ会が聖墳墓の騎士のパンフレットを叙任された者たちに配布していたと考えられる。従って、聖墳墓の騎士と歴代フランス国王との関係、および「十字軍」との関係についての意識を、被叙任者たちがどの程度まで共有していたのかは解らない。

では、最後に5の記述に移ろう。英国教徒である彼が、フランチェスコ会士たちに強い不信感を持っていたことは先に触れたが、それは聖墳墓の騎士に関する記述でも見られる。まず聖墳墓教会に入場した彼は、ガーディアンから騎士となるように持ちかけられるも、拒否した。なぜならば、彼らは主として「庶民身分のフランス人」Plebean Frenchmanに騎士叙任を受けることを勧めるが、それは巡礼者から金銭を巻き上げるための称号のみに過ぎず、彼はそのような称号には関心がなかったからであった。加えて、聖墳墓の騎士となることは「我が国の敵」enemy of our Countryであるスペイン国王に奉仕することを意味すること、およびそもそもトルコ人はあらゆる者に信仰の自由を認めているが、フランチェスコ会に関わる騎士になってしまえば、かえって危険な状況に置かれてしまうことも、拒否の理由であった。上に見たように、彼にとっては、イエニチェリさえいれば安全なので、フランチェスコ会士と関わらなくても何ら不利益はなかったのである⁽¹³¹⁾。

2. 「十字軍」の記憶

幾人かの者たちが、巡礼記の中に過去の「十字軍」の歴史の情報を盛り込むことは当該時期でも変わりはない。ただし、この時期に特徴的であるのは、4・6・8・10のように、ギヨーム・ド・ティールの年代記を情報源としていることである。ギヨームの年代記は『エルサレムの聖戦の歴史』*Historia della guerra sacra di Giervsalemm* という書名で1562年にヴェ

⁽¹²⁵⁾ 6, fol. 384.

⁽¹²⁶⁾ 拙稿「後期十字軍再考(8)」79～80頁；拙稿「後期十字軍再考(9)」153～154頁。

⁽¹²⁷⁾ 6, fol. 329, 376-384.

⁽¹²⁸⁾ 6, fol. 394-424. なお、彼は最後にガーディアンからの証明書を添付する。6, fol. 425-429.

⁽¹²⁹⁾ 拙稿「後期十字軍再考(9)」153頁。

⁽¹³⁰⁾ 4, fol. 213, 216-219. なお、彼は最後に、ガーディアンから叙任されたジャン・オーサ以下46人のリストを添付する。4, fol. 220-221.

⁽¹³¹⁾ 5, 2-p. 41 f.

ネツィアで出版され、その後 1563 年 1590 年におよび版を重ねた⁽¹³²⁾。1563 年に聖地巡礼を行ったルイー・ヴルカーノも恐らくはこの書を読んでいたが⁽¹³³⁾、当該時期になってそれが巡礼志願者の中での参考書（ただし、当然のことながらイタリア語を読むことのできる者にとっての）の一つになったようである。さらに、4・6・8 が聖墳墓の騎士となったことから、特に騎士階級の者たちの中で好まれたことが解る。

当然のことながら、ギヨームの書をヴェネツィアで購入し、その後も携帯していた者の「十字軍」に関する情報量は、その他の者たちのそれよりも圧倒的に多くなる。まずはギヨームの書を読んでいなかっただろう者の記す情報から見てみよう。2 は、聖墳墓教会で目の当たりにしたゴドフロワ・ド・ブイヨンとボードゥアン 1 世の墓碑銘を記すのみである⁽¹³⁴⁾。3 は、やはりゴドフロワたちの墓に関する情報に加えて、彼が制圧したエルサレムの町が 80 年後にはエジプト（アイユブ朝）の、さらにその後にはトルコ（オスマン帝国）の支配下に置かれるようになったこと、および聖王ルイがかつて捕虜とされたことを簡単に記すのみである⁽¹³⁵⁾。5 もゴドフロワたちの墓についての情報の他に、トリポリ近郊にある Huss 城がかつてはフランク人の城であったことのみを記す⁽¹³⁶⁾。7 も、ゴドフロワたちの墓についての情報の他に、エルサレムの支配者がゴドフロワからサラーフディーンへ、そしてセリムへと移行したことを簡単に記すのみである⁽¹³⁷⁾。これらの者たちとやや毛色を異にするのが、9 の記述である。

彼が、ゴドフロワたちの墓についての情報を提供することに加え、ヘブロン近郊にある Biron 城がかつて Templar 騎士修道会に所有されていたこと、真十字架の歴史（ただしヘラクレイオス帝からカール大帝まで）、そしてエルサレムの支配者がゴドフロワからサラーフディーンへ、そしてフリードリヒ 2 世へ、そしてセリムへと移行したことを簡単に紹介する点では、他の者たちと大差はない⁽¹³⁸⁾。彼に特徴的であるものの一つは、モレア（アカイア）侯国の歴史を概観していることである⁽¹³⁹⁾。恐らくは、フランス地域において、『モレア年代記』などが出版されていたものと推察される。またもう一つの特徴は、ゴドフロ

⁽¹³²⁾ Horollogi, G. (tra.), *Historia della guerra sacra di Giervsaletteme, della terra di promissione, e quasi di tutta la Soria ricuperata da' Christiani: Raccolti XXIII. Libri, da Guglielmo Arciuescono di Tiro, & gran Cancelieri del Regno di Gierusalemme: La quale continua ottantaquattro anni per ordine, fin'al Regno di Baldoino IIII.*, Venetia, 1562, rep. 1563, 1590.

⁽¹³³⁾ 拙稿「後期十字軍再考（8）」81 頁。

⁽¹³⁴⁾ 2, fol. 58l f.

⁽¹³⁵⁾ 3-(2), p. 61, 98 f.

⁽¹³⁶⁾ 5, 2-p. 24 f., 54.

⁽¹³⁷⁾ 7, fol. A6r-A7r, 7, 15.

⁽¹³⁸⁾ 9, p. 236 f., 246, 328, 356-358.

⁽¹³⁹⁾ 9, pp. 67-70.

ワたちの墓についての情報の箇所、彼らが「教会の十字軍」*la croisée de l'Eglise* を率いたという情報を付け加えていることである⁽¹⁴⁰⁾。結論の一つを先に言うと、当該時期の巡礼記において「十字軍」に相当する単語が現れるのは、この一例のみである。この一例のみから結論を導き出すのは問題があるが、ここに長らくフランス地域に特徴的・伝統的であった「フランス」と「十字軍」との関係が希薄になったことを見いだすことは可能であろう。

では、ギヨームの年代記を参考書とした3名に話を移そう。彼らもまた、ゴドフロワたちの墓を目の当たりにしたが⁽¹⁴¹⁾、それに付随するような形でギヨームの情報を盛り込む。ただし、そもそもギヨームの年代記がボードゥアン4世期までしかカバーしていないので、彼らの情報もそこで止まることとなる。また、当然のことながら、ほとんどが同じような情報を機械的に盛り込んでいるのみである⁽¹⁴²⁾。それ以外の情報となると、エルサレムの支配権がサラフッディーンからその後にはオスマン帝国に移ったことや、聖王ルイの十字軍についてなど⁽¹⁴³⁾、結局の所、他の巡礼記と同じような記述が中心となる。ただし、彼らの記述がまったく個性を失ったものであるかという点、そうでもない。

4は、キプロス島の歴史について簡単に述べた後に、同島の教会は今や「汚されている」*profanatum* と付け加え⁽¹⁴⁴⁾、ここでもその反イスラーム感情を覗かせる。6の記述で興味深いのは、ヴェネツィアに向かう道中に立ち寄ったインスブルックの町において、フランチェスコ会の教会の中にゴドフロワ・ド・ブイヨンとボードゥアン1世を讃える祭壇を彼が目撃していることである⁽¹⁴⁵⁾。恐らくは他の町にも置かれたこのような祭壇やモニュメントが、人々の「十字軍」の記憶を呼び起こしていた可能性があるからである。

3. 聖地回復の希望

しかし当該時期に至って、聖地回復の希望を記している者は、ついに誰もいなくなってしまう。それどころか、オスマン帝国の勢力に対抗する必要性を訴える者も、7ただ一人となる。

⁽¹⁴⁰⁾ 9, p. 247.

⁽¹⁴¹⁾ 4, fol. 165; 6, fol. 191-193; 8, p. 89, 133.

⁽¹⁴²⁾ 4, fol. 117, 121-123, 126, 129, 184-194, 321-324, 362, 405; 6, fol. 239, 313 f., 338-369, 504; 8, p. 78 f., 97 f., 110, 121, 135, 160, 190-192, 194-196; 10, pp. 114-130, 189, 289, 312, 362, 376, 382, 385, 396-398, 400 f.

⁽¹⁴³⁾ 4, fol. 89, 117, 138, 194, 267 f., 395; 6, fol. 144, 369-372, 524; 8, 97 f., 172, 190; 10, p. 191 f., 194-196. なお、6はクレタ島に関連して第四回十字軍の情報を、10は第五回十字軍の情報やシャルル1世・ダンジューなどの情報を加えるが、それらも客観的なものに留まっている。6, fol. 102; 10, pp. 161-165, 191 f., 313.

⁽¹⁴⁴⁾ 4, fol. 102-104. なお、6もキプロスの歴史を簡単に記すが、彼の場合は客観的記述に留まっている。6, fol. 119, 123.

⁽¹⁴⁵⁾ 6, fol. 10.

かつてゴドフロワ・ド・ブイヨンが回復したエルサレムの町は、今や「ムハンマド教徒の不誠実さ」*Mahumitana perfidia* で覆われている。それどころか、今やその脅威にヨーロッパ世界が晒されている⁽¹⁴⁶⁾。マケドニアやテッサリアがトルコ人の支配下に置かれているのは、キリスト教徒の罪深さゆえであり、「ムハンマド教徒の狂気」*Mahumitana insania* に対抗するためには、キリスト教世界の防衛のための「信仰の強化」*religionis firmamentis* と「和」*concordia* が必要である、と彼は説く⁽¹⁴⁷⁾。彼の言う「信仰の強化」と「和」とは、ルター派やカルヴァン派を始めとする異端を根絶することである⁽¹⁴⁸⁾。このような7の提示する十字軍観を考慮に入れると、9が用いた「教会の十字軍」という表現が、十字軍観の変化という文脈の中で持つ意味も小さくないであろう。さて、これまでに見てきたことと総合すると、7の十字軍観は、巡礼の過程で体験したことに基づくのではなく、それ以前から彼の中で培われていた反異教・反異端という感情の中で培われていたと言える。そして彼は、巡礼記そのものを、正しき神の信仰についての記述で締め括る⁽¹⁴⁹⁾。その他の者たちはというと、恐怖⁽¹⁵⁰⁾・達成感⁽¹⁵¹⁾・神への感謝⁽¹⁵²⁾という感情で、その旅を総括するのみである。

おわりに

本稿では16世紀最後の10年間に作成された聖地巡礼記の分析を行ってきたが、そこから得られた情報を、16世紀全体の流れの中に位置付けるとどうなるのであろうか⁽¹⁵³⁾。

1519年のオスマン帝国によるマムルーク朝の滅亡は、十字軍に二つの大きな変化をもたらした。一つは、盛期十字軍の歴史化・過去化である。このことは、盛期十字軍と後期十字軍とが対比的に捉えられることを意味し、ヴェネツィアで出版されたギヨーム・ド・ティールの年代記は、その傾向をさらに加速させたであろう。

それに関連して、もう一つは十字軍が対オスマン帝国を意味するものとして捉えられるようになったことである。ただし、このような十字軍観の変化は、必ずしも巡礼者たちの経験に起因したわけではなかった。1530年代以降、多くの巡礼者たちは、護衛者として

⁽¹⁴⁶⁾ 7, fol. A6r-B3l.

⁽¹⁴⁷⁾ 7, fol. 136.

⁽¹⁴⁸⁾ 7, fol. 231-323.

⁽¹⁴⁹⁾ 7, fol. 324-399.

⁽¹⁵⁰⁾ 2, fol. 83l.

⁽¹⁵¹⁾ 3-(2), p. 155.

⁽¹⁵²⁾ 6, fol. 881; 9, p. 502; 10, p. 445.

⁽¹⁵³⁾ 拙稿「後期十字軍再考(6)」132~133頁; 拙稿「後期十字軍再考(7)」96~97頁; 拙稿「後期十字軍再考(8)」83頁; 拙稿「後期十字軍再考(9)」157~158頁。

のトルコ人役人たちに対して感謝の念を持った。当初は、トルコ人役人たちの貪欲さゆえに、それが極端な贅辞にまでは至らなかったが、彼らの貪欲さを事前情報として手に入れることができるようになった時、巡礼者たちは彼らに贅辞を送るようになっていった。

このような環境で表に出された十字軍観は、伝統的に十字軍に関与してきたフランス出身者と、宗教改革の過程で新たなカトリック世界の盟主となったスペイン出身者に限定されたものとなった。確かに、1551年のオスマン帝国によるシオン山の占拠という事件を体感した巡礼者たちは、反イスラーム感情と結びついた形で、強い聖地回復の希望を抱くこととなった。ただし、このような感情を露わにするのは、カトリック圏内の教会人に限定されたものである。また、そのような感情が十字軍待望論にまで至るのは、フランス人のみであった。

しかし、16世紀末、ついにフランス人も十字軍待望論の世界から姿を消すこととなった。その背景として考えられるのは、ユグノー戦争に代表されるフランス内部の宗教的混乱や、オスマン帝国との外交関係があったように思われる。後者については、例えば1549年に聖地巡礼を行った外交使節のムッシュ・ガラモンが、十字軍について沈黙していることが証左となるであろう。いずれにせよ、1591～1600年の間で十字軍観を提示しているのは6のみである。それは、ヨーロッパ世界内部の和（＝異端の肅正）とヨーロッパ世界の防衛、という「教会の十字軍」とも呼べる新しいタイプの十字軍観であった。つまり、6の十字軍観は、ヨーロッパ世界における新しい十字軍観の到来を予感させるが、この一例がその萌芽を意味するのか、あるいは特殊例であったのかについて考えるには、引き続き17世紀の検討を行うことが必要であることは言うまでもない。そしてその際には、カトリック教会に「異端」とされる側、すなわち福音派の者たちの動向にも、十分に留意しなければならないであろう。

（本稿は、2017年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）による研究成果の一部である。）